

レビ記

レビ記は聖書の3つ目の書でイスラエルが奴隷から解放され神によってシナイ山のふもとに導かれ契約を結ぶことになった出エジプトの出来事のすぐあとに収められています。イスラエルの民はたちまち神に逆らい契約を破りました。神はご自身の栄光をイスラエルのただ中にある幕屋に住ませたかったのですがイスラエルの罪が神との関係を隔てていました。出エジプト記の最後ではイスラエルの代表であるモーセが神の臨在がある幕屋に入れませんでした。レビ記はその根本的な問題を思い起こさせるように、主は幕屋からモーセを呼びという言葉で始まります。罪と自己中心にまみれたイスラエルは、どうすれば聖なる神と和解ができるのでしょうか。それがレビ記のテーマです。つまり神は寛大にも罪深く墮落した民がきよい神と共に生きるための道を備えてくださるのです。ここで少し神のきよさについて考えてみましょう。これはレビ記を理解するうえで極めて重要です。きよいということばの意味は分離されている。他たに類を見ないということです。聖書において神はすべてのものの創造者、すべての命の造り主という他に類を見ない役割のゆえにほかのすべてのものから分離されています。そして神がきよいなら神の周りの空間もきよいということになります。それは神の善命純潔義で満ちているからです。ですから不正と罪にまみれたイスラエルが神の聖なる臨在の中に住むためには、彼らもきよくなければなりません。彼らの罪の問題には解決が必要です。そこでレビ記の登場です。この書の構造はシンメトリーになっています。レビ記は神がイスラエルをご自分の聖なる臨在の中に住ませるために備えた3つの方法を記しています。最初と最後のセクションは聖なる臨在の中でイスラエルが守るべき儀式の手順についてです。その間は神と民との仲介者である祭司の役割について、そしてより中心はイスラエルのきよさについてです。そしてこの書の中心に最も重要な儀式として宥なだめ

の日は記されておりこうやってレビ記全体はひとつにまとまっています 最後はモーセがイスラエルに対してこの契約に誠実であれと呼びかける短いセクションで閉じられていますでははじめから詳しく見ていきましょう

まず最初のセクションにはイスラエルが命じられた5種類の捧げものについて書かれています そのうちの2つは感謝の捧げもので神が与えてくださったものを記念して捧げるものです 残りの3つは謝罪として捧げるもので例えば一人のイスラエル人が神の造られた善き世界に悪と死をもたらす罪を犯したことを告白する時に動物の血を捧げるようなものです 神は罪びとを滅ぼすのではなく赦したいと願っています

そこで動物が罪を赦す直訳では覆うための象徴 宥めの供え物として代わりに殺されるのです この儀式を行うことによってイスラエル人は神の恵みだけではなくその義もそして自分たちの罪が招く結果の恐ろしさも絶えず思い起こしていたのです

このこと対になっているセクションではイスラエルが毎年行う7つの祭りに関する儀式があります 一つ一つの祭りは神がエジプトの奴隷だったイスラエルをいかに救い出し荒野を通らせどのように約束の地に導いたかというストーリーの各部分を記念するためのものです これらを毎年祝うことでイスラエルは自分たちとは何者で神とはどんな方なのかを思い出すことができるのです

さて祭司についてのセクションを見ましょう

イスラエルを代表して神の御前に入るようにと最初に任命されたのはアロンとその息子たちです

そしてこれと対ついでになるセクションには祭司になるための資格が記されています 祭司は民を代表するのと同時に民にとっては神を代表する存在なので道徳的にまた儀式的に最大限のきよさが求められます 初めのセクションを見ると祭司のきよさがなぜそこまで大事なのがわかります

アロンの家系が祭司に任命された直後アロンの二人の息子たちは軽々しく神の前に出ていき律法を踏みにじったのです

彼らはその場で滅ぼされました この出来事は神のきよさの前で
生きることの素晴らしさとそれを軽んじることの恐ろしい
危険の両方を教えています ですからイスラエルの祭司がき
よくあることまたイスラエル全体がきよくある
ことは重要なのです 次のより内側のセクションはその
ことについて述べています

11 章から 15 章にかけてはイスラエル人に求められる儀式的なきよさ
18 章から 20 章にかけては道徳的なきよさについて記されています
ここではきよいものと汚れたものについて
多く書かれています 神はきよくまた分離された存在
ですからその御前に出ていくイスラエル
人もきよくなければなりません それがきよい汚れていない状態
です 汚れた状態の者は神の御前に出る
ことはできずその状態はきよくない汚れている
と呼ばれます たとえば次のような場合その人は
汚れているとみなされます 精液などに触れた者皮膚病の者
カビや菌に触れた者死体に触れた者
イスラエル人はこれらを死また命を失うことの象徴と考え
更に死に触れた者は汚れると見なしていました
死は神のきよさの対極にあります なぜなら神は命の源だからです
ここで気をつけなければならないのは汚れた状態になるのは
罪でも悪でもないということです 生活していれば起こり得ること
であり汚れた状態は一時的で 1 週間か 2 週間
で終わります 本当に悪いことは死や汚れを象徴
するものを身にまとったまま軽々しく神の前に出ていくこと
なのですこれは許されません 最後に特定の動物を食べること
によって汚れる場合があります このセクションには食に関する
規定が書かれています 衛生上の問題や文化的なタブー
などそれらの動物がなぜ汚れている
かという仮説が今までたくさん立てられて来ましたが
はっきりはわかりません ただし基本的なメッセージは明らか
です これらは神のきよさは彼らの生活
のすべてに及ぶということをイスラエルが思い起こすための
文化的なシンボルなのです これに類似するのは
道徳的なきよさについて書かれたセクションです
イスラエル人はカナン人とは違う生き方をするために召されました

つまり貧しい者を見捨てずに気にかけて性的にも高潔であり
自分たちの国で正義を追い求めるためなのです
レビ記の真ん中にはイスラエルの祭りの一つである
宥めの日についての長い記述があります イスラエル人が一年を通して捧げる
罪の犠牲の中でどうしても生じるもれを補うために
年に一度行う儀式です 大祭司が2頭のヤギを取り
そのうち1頭はきよめのためのささげもので
人々の罪をあがないますもう1頭はアザゼルのヤギと呼ばれる
もので祭司がイスラエルの罪を告白し
その罪を象徴的にこのヤギに移して荒野あらのに放つのです
このことから神がイスラエルの民と平和のうち
に一緒に暮らすために彼らの罪とその結果を取り除き
たい強い思いがわかります この書は契約のすべてに対して
誠実であれというモーセの呼びかけで閉じられます
モーセはイスラエルが律法に従うなら平和と豊かさが与えられる
と述べもし不誠実で神のきよさを軽んじるなら彼らは滅びやが
て約束の地から追い出されるだろうと警告しています
レビ記を聖書の大きな流れの中で捉えたいと思うなら
次の書である民数記の最初の文章を見るといいでしょう
そこに主は幕屋でモーセに告げられたとあります
つまりモーセはイスラエルを代表して
神の御前に出ることができたのです
レビ記に書かれていることが功を奏したわけです
イスラエルは過ちを犯しましたが神はそれを覆う道を備え
罪深い民と平和のうちに住むことができるようにしてくだ
さったのです これがレビ記です

500 字要約

「レビ記」は、聖書の三番目の書で、出エジプトの出来事の直後に、イスラエルが奴隷から解放され、神によってシナイ山のふもとで契約を結びました。しかし、イスラエルの民は契約を破り、神の聖なる臨在に隔たりが生まれました。この書は、イスラエルの罪と神との和解に焦点を当てており、神は罪深い民が神と共に生きるための道を示します。

「レビ記」の構造は対称的で、イスラエルを神の聖なる臨在に導くための3つの方法を示しています。最初と最後のセクションは聖なる臨在の中で守るべき儀式について説明し、その間は祭司の役割に焦点を当て、中心にイスラエル

のきよさについて述べています。そして、宥なだめの日という重要な儀式が中心にあり、全体が一貫性を持たせられています。

イスラエルは、感謝と謝罪の捧げものを通じて神に接近し、祭りを通じて自分たちと神の関係を思い出すことが求められます。祭司は神と民の仲介者として、道徳的かつ儀式的にきよさを備えなければなりません。そのため、祭司のきよさの重要性が強調されます。

「レビ記」は、きよさと汚れについて詳しく説明し、神のきよさとの一致が必要であることを強調します。儀式や食事に関する規定は、神のきよさがイスラエルの生活全体に及ぶことを示す文化的な象徴です。道徳的なきよさについても強調され、イスラエルは貧しい者を助け、高潔で正義を追求するように召されました。

最も重要な儀式は宥なだめの日で、年に一度、罪の犠牲を通じてイスラエルの罪を除去し、神との和解を図ります。モーセは契約に誠実であるように呼びかけ、神の御前に出る機会を示すことで「レビ記」を閉じます。

「レビ記」は、イスラエルが神と共に生き、神のきよさに適合するための指南書であり、罪深い民と神の和解の道を示します。